

臨牀 消化器内科 第 35 卷 ● 総目次

Vol. 35 / No. 1 ~ No. 13

(2020 年 1 月号 ~ 12 月号)

特 集

- | | | | |
|-------|---------------------------------|--------|-----------------------------------|
| No. 1 | ガイドラインに基づいた内視鏡診療 | No. 8 | 薬物療法がひらく新しい肝細胞癌の治療 strategy |
| No. 2 | B 型肝炎 Trends & Topics | No. 9 | これ一冊ですべてわかる 消化器超音波検査〔増刊号〕 |
| No. 3 | 大腸 ESD の工夫 | No. 10 | 分子標的時代の IBD 診療—IBD の寛解導入, 寛解維持の実践 |
| No. 4 | 膵・胆管合流異常と先天性胆道拡張症 | No. 11 | 慢性膵炎—ガイドライン改訂に向けて |
| No. 5 | 消化器領域における免疫チェックポイント阻害薬の現状・今後の展望 | No. 12 | 除菌後時代を迎えた胃癌診療—残された課題を巡って |
| No. 6 | 消化管疾患の ER—診断と治療のポイント | No. 13 | 肝硬変診療の新時代 |
| No. 7 | 薬剤性消化器疾患の診療 | | |

● Vol. 35 No. 1 ガイドラインに基づいた内視鏡診療

- | | | |
|---|--|-------|
| 巻頭言 | 藤本 一真 | 5~6 |
| 1. 「消化器内視鏡の洗浄・消毒標準化にむけたガイドライン」に基づいた内視鏡診療 | 坂田 資尚・岩切 龍一 | 7~14 |
| 2. 「抗血栓薬服用者に対する消化器内視鏡診療ガイドライン」に基づく当院での内視鏡診療経験 | 伊藤 峻・小野 敏嗣
藤城 光弘 | 15~22 |
| 3. 「内視鏡診療における鎮静に関するガイドライン」と当院における鎮静の実践 | 菅谷 武史・入澤 篤志
郷田 憲一・富永 圭一
土田 幸平 | 23~30 |
| 4. 「POEM 診療ガイドライン」の臨床 | 塩飽 洋生・岡田 浩樹
増井 友恵・大宮 俊啓
山下 兼史・南 ひとみ
井上 晴洋・長谷川 傑 | 31~37 |

- | | | |
|--|---|-------|
| 5. 「非静脈瘤性上部消化管出血における内視鏡診療ガイドライン」に基づいた臨床的対応 | 伊藤 大策・井口 幹崇 | 39~44 |
| 6. 「早期胃癌の内視鏡診断ガイドライン」に基づいた診療の実践 | 吉永 繁高・阿部清一郎
野中 哲・鈴木 晴久
小田 一郎・斎藤 豊 | 45~51 |
| 7. 「胃癌に対する ESD/EMR ガイドライン」の実臨床での活用 | 島田清太郎・小野 裕之 | 53~61 |
| 8. 「小腸内視鏡診療ガイドライン」に基づいた内視鏡診療 | 矢野 智則 | 63~71 |
| 9. 「大腸 ESD/EMR ガイドライン」の当科における運用 | 田中 信治・保田 和毅
山下 賢・二宮 悠樹
岡 志郎・茶山 一彰 | 73~80 |

10. 「EST 診療ガイドライン」に基づく診療の実 際	良沢 昭銘・水出 雅文 谷坂 優樹・原田 舞子 小川 智也・野口 達矢	81～86	2. ESD の出血高リスク症例に対する対応と工 夫	坂田 資尚・下田 良 藤本 一真	241～248
11. 「EPLBD 診療ガイドライン」の要点と実際	殿塚 亮祐・土屋 貴愛 糸井 隆夫	87～92	[各論]		
12. 超音波内視鏡下胆道ドレナージ術に関する 診療ガイドラインの解説	伊佐山浩通	93～98	3. トラクション		
●Vol. 35 No. 2 B型肝炎 Trends & Topics			(1) S-O クリップ	福嶋 浩文・坂本 直人 村上 敬・上山 浩也 長田 太郎・永原 章仁	249～254
巻頭言ー既存抗ウイルス療法の境界	田中 榮司	125～126	(2) 糸付きクリップ	朝山 直樹・永田 信二 嶋田賢次郎・青山 大輝 福本 晃・向井 伸一	255～262
1. わが国の B 型肝炎ウイルス感染症の現状と 展望	田中 純子	127～135	(3) Multi loop 法	田沼 徳真・濱本 英剛 鈴木雄一郎・須藤 豪太 原田 拓・潟沼 朗生	263～268
2. B 型肝炎ウイルスの感染・複製機構：なぜ HBV 排除は困難なのか	五十川正記・田中 靖人	137～145	(4) エンドトラック法	阪口 博哉・豊永 高史 田中 心和・鷹尾 俊達 森田 圭紀・児玉 裕三	269～274
3. B 型肝炎ウイルス遺伝子型と予後	鈴木 文孝	147～152	(5) Magnetic anchor 法	松崎 一平・服部 昌志 中澤 三郎	275～280
4. B 型肝炎に対する核酸アナログ治療	桐野 桜・黒崎 雅之	153～160	4. 剥離の工夫		
5. B 型慢性肝炎に対する核酸アナログ/イン ターフェロン シーケンシャル療法	松本 晶博	161～167	(1) Water-pocket 法	原田 英明・村上 大輔 中原良太郎・岩城 智之 勝山 泰志・天野 祐二	281～286
6. 日本肝臓学会「B 型肝炎治療ガイドライン」 解説	浅岡 良成・田中 篤	169～174	(2) トラクションデバイスを使用した pocket- creation method の有用性	井出 大資・五十嵐正広 千野 晶子・斎藤 彰一	287～294
7. B 型肝炎治療と HBs 抗原, HB コア関連抗原	八橋 弘	175～182	(3) Multi-Tunnel 法	港 洋平・大圃 研 鈴木雄一郎・瀧田麻衣子 酒井 英嗣・村元 喬	295～302
8. B 型肝炎再活性化とその対策	持田 智	183～190	5. 偶発症予防の工夫		
9. B 型慢性肝炎治療の肝発癌への影響	朝比奈靖浩	191～198	(1) Clip on clip 閉鎖法による縫縮	野村 達磨・杉本 真也 大山田 純・亀井 昭 林 芳和・山本 博徳	303～308
10. わが国における HB ワクチン使用の現状と展 望	土肥 弘義・考藤 達哉	199～204	(2) 留置スネアによる縫縮	日原 大輔・高丸 博之 阿部清一郎・松田 尚久 斎藤 豊・前谷 容	309～317
11. 新規抗 B 型肝炎ウイルス薬の開発の現状と 展望	大塚 基之・關場 一磨 船戸 和義・小池 和彦	205～210	(3) Ring-clip による縫縮	吉井 新二・山野 泰穂 仲瀬 裕志	318～322
●Vol. 35 No. 3 大腸 ESD の工夫					
巻頭言	田中 信治	233～234			
[総論]					
1. ESD 困難例に対する対応と工夫	林 芳和・山本 博徳	235～239			

●Vol. 35 No. 4 膵・胆管合流異常と先天性胆道拡張症

巻頭言	神澤 輝実	345～347
1. 診断基準		
	古来 貴寛・木村 康利	
	今村 将史・永山 稔	
	及能 大輔・山口 洋志	
	金澤あゆみ・村上 武志	
	竹政伊知朗	349～354
2. 疫 学		
	石橋 広樹・島田 光生	
	森根 裕二	355～362
3. 形態的特徴からみた発生論		
	藤井 秀樹・細村 直弘	
	川井田博充・市川 大輔	363～372
4. 胆管非拡張型膵・胆管合流異常		
	志村 正博・浅野 之夫	
	堀口 明彦	373～377
5. 臨床症状と膵胆道合併症		
	田島 義証・船橋 功匡	
	久守 孝司・西 健	
	林 彦多・川畑 康成	379～384
6. 胆道発癌		
	土田 明彦・永川 裕一	
	林 豊・瀧下 智恵	
	刑部 弘哲・木谷 嘉孝	385～389
7. US と EUS		
	植村修一郎・樋口 亮太	
	赤尾 潤一・長尾 健太	
	高山 敬子・山本 雅一	391～395
8. CT		
	岩崎 将・宅間 健介	
	原 精一・伊藤 謙	
	岡野 直樹・五十嵐良典	397～402
9. MRCP		
	山本 智支・乾 和郎	
	片野 義明・三好 広尚	
	小林 隆・舘 佳彦	403～406
10. 手 術		
	森 泰寿・渡邊 雄介	
	池永 直樹・仲田 興平	
	大塚 隆生・中村 雅史	407～412
11. 術後晩期合併症		
	高屋敷 史・吉富 秀幸	
	古川 勝規・久保木 知	
	高野 重紹・大塚 将之	413～416
12. 膵胆管高位合流		
	小川 貴央・伊藤 啓	
	越田 真介・菅野 良秀	
	野田 裕	417～420

●Vol. 35 No. 5 消化器領域における免疫チェックポイント
阻害薬の現状・今後の展望

巻頭言	朴 成和	445
1. がん免疫総論		
	和田 尚	447～453
2. がん免疫療法の歴史		
	中島 裕理・中面 哲也	455～462
3. 免疫チェックポイント阻害薬の概要		
	能澤 一樹・室 圭	463～470
4. 免疫チェックポイント阻害薬による消化器がん治療		
(1) 消化管がんにおける免疫チェックポイント阻害薬の現状		
	山崎 嵩之・高島 淳生	
	朴 成和	471～478
(2) 肝胆膵系のがんに対する治療の現状		
	佐竹 智行・奥坂 拓志	479～486
5. 免疫チェックポイント阻害薬の臨床効果予測—バイオマーカー開発の現状		
	佐藤 靖祥	487～493
6. 免疫チェックポイント阻害薬と他剤との併用療法		
	三谷誠一郎・川上 尚人	
	中川 和彦	495～500
7. 免疫チェックポイント阻害薬の有害事象と対策		
(1) 総 論		
	新井 誠人・滝口 裕一	501～505
(2) 免疫チェックポイント阻害薬による内分泌障害		
	小林 朋子・岩間信太郎	
	有馬 寛	506～510
(3) 免疫チェックポイント阻害薬による神経・筋関連有害事象		
	関 守信・中原 仁	
	鈴木 重明	511～518
8. がん免疫療法の課題と今後の展開		
(1) がん微小環境での免疫応答に着目した免疫療法		
	和田 啓孝・藤城 光弘	
	西川 博嘉	519～524
(2) 遺伝子改変技術を用いたがん免疫細胞療法		
	城崎 幸介・佐古田幸美	
	玉田 耕治	525～531
(3) がん免疫療法の開発状況と今後の展望		
	北野 滋久	532～540

●Vol. 35 No. 6 消化管疾患のER—診断と治療のポイント

巻頭言	瓜田 純久	561～562
1. 救急医療における消化管疾患の疫学	世良 俊樹	563～569
2. 腹部救急疾患における画像検査の選択	水沼 仁孝	571～580
3. PPI 時代の上部消化管出血・上部消化管穿孔	三上 達也・立田 哲也 珍田 大輔・菊池 英純 澤谷 学・福田 眞作	581～586
4. 下部消化管出血	今村 倫敦・石井 直樹 矢野 貴彦・蒲池 健一	587～596
5. 難治性・再発性憩室炎—S 状結腸膀胱瘻を中心として	富沢 賢治・的場周一郎 平松 康輔・花岡 裕 戸田 重夫・黒柳 洋弥	597～604
6. 急性虫垂炎の診断と治療	渡邊 学・浅井 浩司 森山 穂高・鯨岡 学 渡邊隆太郎・斉田 芳久	605～610
7. 腸閉塞の CT 画像診断	島田 長人・澤野 貴亮 保坂 浩加・高地 良介 皆川 輝彦・本田 善子	611～617
8. 消化器内科が遭遇する血管病変—上腸間膜動脈閉塞症, 急性大動脈解離, NOMI, 虚血性腸炎	鈴木 修司・下田 貢 島崎 二郎・大城 幸雄 西田 清孝	619～624
9. 救急医療で遭遇する腸炎	中嶋 均	625～630
10. 対応に苦慮する腹部救急対策		
(1) 抗血栓薬の休薬と再開の指針—急性消化管出血に対する抗血栓薬の対応	石井 孝政・朝日 公一 齋藤 登	631～636
(2) 診断が困難な補体病—C1 インヒビター欠損症・血管性浮腫	前田 正	637～640
(3) 排便障害, 身体表現性障害に伴う救急医療	水城 啓・永田 博司	641～647

●Vol. 35 No. 7 薬剤性消化器疾患の診療

巻頭言	滝川 一	673～674
1. 薬剤性消化器疾患のメカニズム		
(1) 上部消化管(食道・胃・十二指腸)	加藤 元嗣・米谷 則重 松田宗一郎・津田 桃子	

(2) 下部消化管(小腸・大腸)	久保 公利	675～681
	渡邊 俊雄・灘谷 祐二 大谷 恒史・谷川 徹也 藤原 靖弘	683～688
(3) 肝 臓	浅岡 良成・田中 篤	689～694
2. 薬剤性消化器疾患の診断		
(1) 胃, 十二指腸	坂田 資尚・岩切 龍一	695～701
(2) 下部消化管(小腸・大腸)	藤田 朋紀・藤江 慎也 町田 卓郎・嘉成 悠介 勝木 伸一・岡本 宗則	703～710
(3) 肝 臓—薬物性肝障害の診断: DDW-J 2004 ワークショップ薬物性肝障害診断基準のこれまでとこれから	渡邊 真彰・渋谷 明隆	711～718
3. 薬剤性消化器疾患の治療		
(1) 胃, 十二指腸	千葉 俊美・菊池 哲	719～726
(2) 下部消化管(小腸・大腸)	黒河 聖・牧口 祐介 秦 史壯	727～732
(3) 肝 臓	長岡 克弥・徳永 亮之 田中 基彦	733～740
4. その他の薬剤性消化器疾患		
(1) 薬剤性(摂食)嚥下障害	野崎 園子	741～745
(2) 薬剤性食道粘膜傷害	藤田 孝義・青井 広典 山田 弘志・森井 正哉 飯塚 昭男	746～750
(3) 薬剤性膵炎	神澤 輝実・千葉 和朗 菊山 正隆	751～758
(4) 免疫チェックポイント阻害薬による消化器障害	伊藤 隆徳・澤田つな騎 中村 正直・本多 隆 石上 雅敏・藤城 光弘	759～765

●Vol. 35 No. 8 薬物療法がひろく新しい肝細胞癌の治療 strategy

巻頭言—新しい治療薬は新しい革袋に盛れ	小池 和彦	785～786
1. 肝細胞癌に対する薬物療法		
(1) 治療アルゴリズムにおける位置づけ	山下 竜也・高田 昇 寺島 健志・荒井 邦明	

	金子 周一	787～792	3 経腹壁超音波膵臓領域精密撮像方法		
(2) ファーストライン導入のタイミングの現状と課題			田中 幸子・福田 順子		
	森口 理久・伊藤 義人	793～800	大川 和良	913～916	
(3) セカンドラインへの切り替えタイミングの現状と課題			4 ラジアル型超音波内視鏡による標準描出法		
	上嶋 一臣	801～805	石川 卓哉・川嶋 啓揮		
(4) 腫瘍マーカーや血液バイオマーカーの現状と課題			大野栄三郎・鈴木 博貴		
	能祖 一裕	807～812	植月 康太・藤城 光弘	917～921	
(5) 画像による治療効果判定の現状と課題			5 コンベックス型超音波内視鏡による胆膵領域の標準的描出法		
	小川 力・工藤 正俊	813～820	入澤 篤志・土田 幸平		
(6) 肝予備能評価の重要性—ALBI グレードを中心に			常見美佐子・星 恒輝		
	平岡 淳・熊田 卓	821～826	陣内 秀仁・山部 茜子	922～929	
2. 肝細胞癌に対する薬物療法の現状と課題			6 超音波内視鏡下生検の基本		
(1) 肝細胞癌に対するソラフェニブの現状と課題			奥野のぞみ・水野 伸匡		
	友成 哲・高山 哲治	827～833	羽場 真・桑原 崇通		
(2) 肝細胞癌に対するレゴラフェニブの現状と課題			孝田 博輝・宮野 亮		
	興梠 慧輔・小笠原定久		原 和生	930～934	
	近藤 孝行・鈴木英一郎				
	千葉 哲博・加藤 直也	834～838	第Ⅱ章 肝臓領域		
(3) 肝細胞癌に対するレンバチニブの現状と課題			肝臓領域の超音波 overview		
	土谷 薫	839～846	飯島 尋子・西村 貴士	936～940	
(4) 肝細胞癌に対するラムシルマブのエビデンスと初期使用経験			1 びまん性肝疾患(肝線維化診断)		
	末廣 洋介・河岡 友和		① B-mode 画像による診断		
	内川 慎介・相方 浩		住野 泰清・和久井紀貴		
	茶山 一彰	847～852	永井 英成・丸山 憲一	941～953	
3. 肝細胞癌に対する新規薬物療法の最新情報			② Transient elastography と real-time tissue elastography		
(1) カボザンチニブの最新情報			川部 直人・吉岡健太郎		
	小林 智	853～857	橋本 千樹・廣岡 芳樹	954～960	
(2) アテゾリズマブとベバシズマブ併用の最新情報			③ SWE and dispersion imaging		
	岩本 英希	859～863	熊田 卓・山田 哲		
(3) その他の新規薬物療法の最新情報			安田 諭・豊田 秀徳		
	池田 公史	864～868	小川 定信	961～965	
4. 肝細胞癌に対する個別化医療の現状と展望			2 びまん性肝疾患(脂肪化診断)		
	恵莊 裕嗣	869～873	① B-mode 画像による診断		
●Vol. 35 No. 9 これ一冊ですべてわかる			多田 俊史・中村進一郎		
消化器超音波検査			豊田 秀徳・安田 諭		
第Ⅰ章 撮像方法(経腹壁超音波および超音波内視鏡検査)			小川 定信・熊田 卓	966～970	
1 経腹壁超音波のスタンダードな撮像方法			② 超音波による肝脂肪化診断		
	小川 真広	902～908	西村 貴士・飯島 尋子	971～975	
2 経腹壁超音波胆道領域精密撮像方法			3 腫瘍性肝疾患		
	岡庭 信司	909～912	① 良性肝腫瘍の診断		
			斎藤 聡・伝法 秀幸	976～982	
			② 悪性肝腫瘍の診断		
			a. 肝細胞癌の診断		
			土谷 薫	983～991	
			b. 胆管細胞癌と転移性肝癌, その他		
			黒松 亮子	992～998	
			4 治療支援と治療		
			① Fusion imaging による肝癌治療支援		
			坂本 梓・木村 達		

	荒井 修・大崎 往夫 喜多 竜一・丸澤 宏之	999～1005
②	肝生検・RFA の基本—造影超音波の使用も含めて 南 康範・工藤 正俊	1006～1009
③	強力集束超音波(HIFU)療法—膵領域も含めて 祖父尼 淳	1010～1020
第Ⅲ章 胆膵領域		
胆膵領域の超音波 overview		
	乾 和郎	1022～1024
1	胆管癌診断における超音波検査の役割 松原 浩・浦野 文博 内藤 岳人・山田 雅弘 山本 英子・服部 峻	1025～1030
2	胆嚢癌診断における超音波検査の役割 橋本 千樹・廣岡 芳樹 川部 直人・中野 卓二 中岡 和徳・田中 浩敬	1031～1037
3	十二指腸乳頭部腫瘍における超音波検査の役割 川嶋 啓揮・大野栄三郎 石川 卓哉・飯田 忠 鈴木 博貴・藤城 光弘	1038～1042
4	膵充実性腫瘤診断における超音波検査の役割 川路 祐輝・北野 雅之	1043～1049
5	膵嚢胞性腫瘤診断における超音波検査の役割 大野栄三郎・川嶋 啓揮 石川 卓哉・藤城 光弘	1050～1056
6	胆膵領域における超音波エラストグラフィの役割 桑原 崇通・原 和生 水野 伸匡・羽場 真 奥野のぞみ	1057～1062
7	胆膵領域における PTBD/PTGBD の役割 三好 広尚・乾 和郎 片野 義明・小林 隆 舘 佳彦・山本 智支	1063～1066
8	膵疾患・胆道疾患診断における EUS-FNA の役割 菅野 敦・三浦 晋 滝川 哲也・糸 潔 正宗 淳	1067～1074
9	膵腫瘍に対する超音波内視鏡下治療 三好 人正・蘆田 玲子 高山 哲治・北野 雅之	1075～1081
第Ⅳ章 消化管超音波検査		
消化管の超音波検査 overview		
	丸川 高弘・藤城 光弘	1084～1086

1 経腹壁超音波検査			
①	経腹壁消化管エコーの歴史と変遷	湯浅 肇・廣岡 大司	1087～1090
②	消化管疾患診断における体外式超音波検査の役割	畠 二郎・今村 祐志 眞部 紀明・松本 啓志 塩谷 昭子・春間 賢	1091～1095
③	腫瘍性疾患の診断	今村 祐志・畠 二郎	1096～1101
④	炎症性疾患の診断	長谷川雄一・万代 恭史 高田 知明・若松 徹 鹿島 励・福田 和司	1102～1112
2 超音波内視鏡検査			
①	超音波内視鏡による消化管描出法(専用機・細径プローブとも)	宮原 良二・船坂 好平 廣岡 芳樹	1113～1117
②	消化管上皮性腫瘍の深達度診断		
a.	食道癌の深達度診断	有馬美和子・都宮 美華 剛崎 有加	1118～1124
b.	胃癌の深達度診断	柴田 知行・大久保正明 船坂 好平・廣岡 芳樹 大宮 直木	1125～1131
c.	大腸癌の深達度診断	小林 清典・川岸 加奈 迎 美幸・横山 薫 佐田 美和・小泉和二郎	1132～1137
3 消化管粘膜下腫瘍			
		船坂 好平	1138～1143
第V章 POCUS			
1 腹部POCUSの動向			
		亀田 徹	1146～1151
2 携帯型超音波装置(ポケットエコー)を用いた消化器診療			
		石田 秀明・長沼 裕子 小川 眞広	1152～1156
3 腹部POCUSの卒前、卒後教育			
		太田 智行	1157～1160
【コラム】腹部外傷時の超音波(FASTを中心 に)			
		小泉 哲・大坪 毅人	1161～1163
第VI章 超音波とAI—AIによる肝腫瘤検出・判 別支援システムの開発			
		西田直生志・山川 誠 椎名 毅・工藤 正俊	1166～1174

●Vol. 35 No. 10 分子標的時代の IBD 診療—IBD の寛解導入、寛解維持の実践

巻頭言	渡辺 守	1185～1186
1. 潰瘍性大腸炎に対する寛解導入と寛解維持		
(1) 潰瘍性大腸炎における寛解導入と寛解維持の定義	石田 夏樹・宮津 隆裕 田村 智・谷 伸也 大澤 恵・杉本 健	1187～1192
(2) 潰瘍性大腸炎に対する寛解導入療法と薬剤の位置づけ	吉村 直樹	1193～1200
(3) 潰瘍性大腸炎に対する 5-ASA による寛解維持療法と薬剤使用のコツ	竹内 健	1201～1206
(4) 潰瘍性大腸炎治療の寛解導入と寛解維持における内視鏡介入の意義	高橋 索真・稲葉 知己 大谷 弘樹・安藤 翠 中村 聡子・溝渕 光一	1207～1212
2. クロウン病に対する寛解導入と寛解維持		
(1) クロウン病治療における寛解導入と寛解維持の定義	細見 周平・西田 裕 鏑谷 成弘・鎌田 紀子 藤原 靖弘	1213～1219
(2) クロウン病に対する寛解導入療法と薬剤の選択	杉山 浩平・那須野正尚 田中 浩紀・加藤 正樹 宮川 麻希・本谷 聡	1220～1226
(3) クロウン病に対する寛解維持療法と薬剤使用のコツ	石田 哲也	1227～1234
(4) クロウン病治療の寛解導入と寛解維持における内視鏡介入の意義	大森 鉄平・高鹿 美姫 村杉 瞬・神林 玄隆 栗山 朋子・米澤麻利亜	1235～1244
3. IBD 治療における寛解導入と寛解維持に関するトピック		
(1) IBD 治療における青黛 ^{せいだい} の有用性と安全性	長沼 誠	1245～1249
(2) クロウン病寛解導入療法における Delayed response について	新崎信一郎・飯島 英樹 竹原 徹郎	1251～1255
(3) IBD 寛解維持期における便中マーカーによるモニタリング	平岡佐規子・安富絵里子	

岡 昌平・井口 俊博 高原 政宏・岡田 裕之	1256～1262	
(4) IBD 寛解導入療法における再生医療 小田切信介・大西 俊介 桂田 武彦・坂本 直哉	1263～1266	
(5) UC 関連腫瘍の早期診断と治療 山村 健史・中村 正直 前田 啓子・澤田つな騎 石川 恵里・喜田 裕一 古川 和宏・川嶋 啓揮 藤城 光弘	1267～1273	
(6) IBD センターの構想と効果, 社会的役割 中村 正直・中山 吾郎 山村 健史・服部 憲史 澤田つな騎・佐藤 雄介 藤城 光弘	1275～1279	
●Vol. 35 No. 11 慢性膵炎—ガイドライン改訂に向けて		
巻頭言 岡崎 和一	1295～1296	
1. 慢性膵炎の病態		
(1) 成因, 疫学 藤森 尚・高松 悠 松本 一秀・寺松 克人 大野 隆真・小川 佳宏	1297～1302	
(2) 分子メカニズム 濱田 晋・菊田 和宏 糸 潔・正宗 淳	1303～1308	
(3) 病 理 能登原憲司	1309～1312	
2. 早期慢性膵炎の概念と診断・治療 佐田 尚宏・佐久間康成 笹沼 英紀・小泉 大 遠藤 和洋・鈴木 正徳		1313～1318
3. 膵性糖尿病 丹藤 雄介・柳町 幸 松橋 有紀・佐藤 江里		1319～1324
4. 慢性膵炎と膵発癌 田原 純子・清水 京子		1325～1329
5. 慢性膵炎の診断		
(1) 診断の進め方 廣田 衛久	1331～1336	
(2) 超音波診断, 超音波内視鏡診断 入澤 篤志・星 恒輝 山部 茜子・井澤 直哉 瀧本 洋一・山宮 知 永島 一憲・水口 貴仁 常見美佐子	1337～1344	
(3) CT/MRI による慢性膵炎の画像診断にお ける展開 宮川 宏之・北川 翔 奥 大樹・岡村 圭也		

6. 慢性膵炎の治療	平山 敦・長川 達哉	1345～1351
(1) 治療の基本方針		
	阪上 順一・香川 恵造	
	保田 宏明・十亀 義生	
	奥田 隆史・伊藤 義人	1353～1363
(2) 膵石・膵管狭窄の内視鏡治療		
	丸尾 達・植木 敏晴	
	松岡 大介・田中 利幸	
	平塚 裕晃・土居 雅宗	
	畑山 勝子・永山林太郎	
	野間栄次郎・八尾 建史	1364～1368
(3) 仮性嚢胞・胆管狭窄の内視鏡治療		
	岩井 知久・木田 光広	
	奥脇 興介・長谷川力谷	
	渡辺 真郁・黒須 貴浩	
	小泉和二郎	1369～1376
(4) ESWL		
	伊藤 謙・岸本 有為	
	岡野 直樹・原 精一	
	宅間 健介・五十嵐良典	1377～1383
(5) 外科手術		
	竹山 宜典	1384～1390
●Vol. 35 No. 12 除菌後時代を迎えた胃癌診療—残された課題を巡って		
巻頭言	一瀬 雅夫	1407～1408
1. 除菌後胃癌を巡る課題		
(1) <i>H. pylori</i> 除菌後 10 年以降の胃癌リスク		
	水野 元夫・武 進	
	石木 邦治・岡田 裕之	1409～1414
(2) <i>H. pylori</i> 感染胃炎からの発癌と除菌後胃癌発生機序— <i>H. pylori</i> 除菌後胃癌発生における分子機構		
	福田 昌英・牛島 俊和	1415～1420
(3) 除菌後胃癌の診断を巡って		
a. 臨床病理学的特徴		
	小林 正明・盛田 景介	
	菅野 智之・青柳 智也	
	栗田 聡・塩路 和彦	1421～1427
b. 内視鏡診断の要点		
	藤崎 順子	1428～1437
c. 効率的な内視鏡診断—各モダリティの精度、特性、適切な選択		
	堀口 徳之・田原 智満	
	船坂 好平・柴田 知行	
	大宮 直木	1438～1443
d. 除菌後発見胃癌の好発部位は中間帯である		
	八木 一芳・星 隆洋	
	阿部 聡司・森田 慎一	
	須田 剛士・寺井 崇二	1444～1449

e. 除菌後胃癌—診断困難例を巡って		
① 除菌による粘膜表面の形態変化・色調変化	山崎 琢士	1450～1458
② 除菌による側方進展への影響		
	伊藤 信仁・船坂 好平	
	古川 和宏・角嶋 直美	
	中村 正直・藤城 光弘	1459～1464
(4) 除菌後胃癌のハイリスク		
	井口 幹崇・瀧 真也	
	伊藤 大策・吉田 岳市	
	前北 隆雄・北野 雅之	1465～1470
2. <i>H. pylori</i> 未感染胃癌を巡る課題		
(1) 内視鏡的・臨床病理学的特徴		
	赤澤 陽一・上山 浩也	
	八尾 隆史・永原 章仁	1471～1480
(2) 非噴門部胃癌と噴門部胃癌の臨床病理学的比較検討		
	向井 伸一・永田 信二	
	金子 真弓・朝山 直樹	
	青山 大輝・福本 晃	1481～1486
3. EB ウイルス関連胃癌		
	浦牛原幸治・大野 一将	
	小林 正佳・細川 貴範	
	川口 淳・武田 雄一	1487～1495
4. 遺伝的要因を背景とした胃癌		
	岩泉 守哉・相村 春彦	1497～1500
5. A 型胃炎(自己免疫性胃炎)を背景とした胃癌		
	原 裕一・蔵原 晃一	
	大城 由美・八坂 弘樹	
	南 一仁・浦岡 尚平	
	池上 幸治	1501～1507
●Vol. 35 No. 13 肝硬変診療の新時代		
巻頭言	吉治 仁志	1527～1528
1. 肝硬変の成因別実態		
	水野 恵・上野 義之	1529～1534
2. 肝硬変のステージ分類と機能評価—ALBI スコア、肝線維化の非侵襲的診断法も含めて		
	厚川 正則・近藤 千紗	
	新井 泰央	1535～1541
3. 肝硬変合併症の診断と治療		
(1) 肝硬変の腹水治療		
	近藤 泰輝・諸沢 樹	1543～1548
(2) 食道静脈瘤の治療		
	今井 幸紀・持田 智	1549～1554
(3) 肝性脳症の予防と治療		
	魚嶋 晴紀・日高 央	1555～1563
(4) 肝硬変におけるサルコペニアとその対策		
	川口 巧・橋田 竜騎	
	神谷 俊次・広田 桂介	

永松 あゆ・中野 暖 堤 翼・山村 咲良 下瀬 茂男・新関 敬 松瀬 博夫・鳥村 拓司	1564～1573	5. 抗ウイルス療法による B 型肝炎の改善と 限界	鈴木 文孝	1587～1592
(5) 肝硬変におけるこむら返り(筋痙攣)の実 態と治療		6. SVR 後 C 型肝炎の改善と限界	稲田 賢人・黒崎 雅之	1593～1599
4. 肝硬変の栄養療法：理論と実際	岩佐 元雄 1574～1579 白木 亮 1581～1586	7. 肝再生治療開発の現況	竹内 卓・渡邊 雄介 土屋 淳紀・寺井 崇二	1601～1605

|||||内視鏡の読み方(連載)|||||

Vol. 35 No. 1 トリソミー8を伴う骨髄異形成症候群に合併した 腸型バーチエット病	高林 馨・林 由紀恵 牟田口 真・細江 直樹 緒方 晴彦	99～102	土橋 昭・阿部圭一郎 金森 瑛・鈴木 統裕 入澤 篤志	649～653	
Vol. 35 No. 2 制酸薬投与により NBI 拡大所見が変化した除菌 後発見低異型度分化型胃癌の 1 例	勝田 真琴・上尾 哲也 高橋 晴彦・米増 博俊 福田 昌英・石飛 裕和 九嶋 亮治・村上 和成	219～225	Vol. 35 No. 7 不整な微小血管構築像が範囲診断に有用であつ た除菌後胃癌の 1 例	福本 康史・万波 智彦 若槻 俊之・古立 真一 清水 慎一	767～771
Vol. 35 No. 3 生検後に再発・増大した食道超微小癌の 1 例	郷田 憲一・小林 寛子 金森 瑛・阿部圭一郎 鈴木 統裕・入澤 篤志	323～327	Vol. 35 No. 8 黄色調の早期胃癌	福田 弘武・金坂 卓 上堂 文也・北村 昌紀	881～885
Vol. 35 No. 4 0- I p+ II c 型早期大腸癌	岸田 圭弘・堀田 欣一 今井健一郎・伊藤 紗代 下田 忠和・小野 裕之	427～432	Vol. 35 No. 11 白色扁平隆起を呈した胃底腺粘膜型胃癌の 1 例	小島 康司・内多 訓久	1395～1399
Vol. 35 No. 5 SM 浸潤を伴う大腸 LST-G の内視鏡診断	高田 和典・堀田 欣一	547～554	Vol. 35 No. 12 ダビガトランによる薬剤性食道粘膜傷害が疑わ れた食道炎の 1 例	辻 陽介・坂口 賀基 小池 和彦	1508～1511
Vol. 35 No. 6 食道胃接合部に発生し扁平上皮下浸潤を伴った 小 SM 腺癌の 1 例	郷田 憲一・小林 雅邦		Vol. 35 No. 13 便潜血陽性を契機に診断された腺腫を合併した Cronkhite-Canada 症候群の 1 例	松村 倫明・加藤 順 松坂 恵介・明杖 直樹 太田 佑樹・沖元謙一郎 齊藤 景子・新井 誠人 加藤 直也	1607～1612

|||||検査値の読み方(連載)|||||

Vol. 35 No. 1 明らかな誘因がなく B 型肝炎再活性化を呈した 超高齢女性の 1 例	正木 尚彦・木平 英里 野崎 雄一・柳瀬 幹雄	113～117	Vol. 35 No. 2 黄疸と胆道系酵素の上昇を認めた高齢男性の 1 例	中牟田 誠	211～215
---	----------------------------	---------	--	-------	---------

Vol. 35 No. 3 肝細胞癌(HCC)腫瘍マーカー	近藤 泰輝・福田 遼	329～332	Vol. 35 No. 8 腹部膨満と倦怠感を主訴とした高齢男性の1例	増田恵利香・柳瀬 幹雄	773～777
Vol. 35 No. 4 コリンエステラーゼとグレリン	水田 敏彦	421～425	Vol. 35 No. 10 全身性エリテマトーデスに併発した非アルコール性脂肪肝炎(NASH)の1例	中牟田 誠	875～879
Vol. 35 No. 6 サラゾスルファピリジン服用後に発生した2峰性の肝障害の1例	魚嶋 晴紀・日高 央 田中 賢明・白井 京美	655～660	Vol. 35 No. 12 透析中の肝硬変症例に生じた肝性脳症	今 一義	1280～1284
Vol. 35 No. 7 初期対応の重要性が示唆されたE型急性肝炎症例	正木 尚彦・野崎 雄一		Vol. 35 No. 13 肝細胞癌に対するマルチキナーゼ阻害薬—検査値に着目したマネージメント	浅岡 良成・田中 篤 内野 康志・吉田 英雄	1516～1520 1613～1617

|||||薬の知識(連載)|||||

Vol. 35 No. 1 ブデソニドフォーム(レクタブル®)	長沼 誠・金井 隆典	109～112	Vol. 35 No. 10 オニバイド®(イリノテカン・リポソーム製剤)—がん化学療法後に増悪した治癒切除不能な膵癌に対する適応承認	佐竹 智行・奥坂 拓志	1285～1287
Vol. 35 No. 3 ラムシルマブ(サイラムザ®)—肝細胞癌への適用について	上嶋 一臣・工藤 正俊	333～336	Vol. 35 No. 12 ニボルマブ(オプジーボ®)—根治切除不能・再発食道癌および、根治切除不能・再発のMSI-Hを有する結腸・直腸癌の治療法として	三國 隼人・平野 秀和 朴 成和	1512～1515
Vol. 35 No. 4 トファシチニブ(ゼルヤンツ®)	猿田 雅之	434～438			
Vol. 35 No. 5 内視鏡用粘膜下注入材(リフタルK®)	小野 裕之・北野 正剛	543～545			

|||||手技の解説(連載)|||||

Vol. 35 No. 6 Sit-stand endoscopic workstation—人間工学から考える内視鏡	松崎 一平・服部 昌志 山本孔次郎・榎原 毅 中村 正直・藤城 光弘	661～666	Vol. 35 No. 11 人工知能ソフトウェア EndoBRAIN-EYE を使用した大腸内視鏡検査の可能性	工藤 進英・三澤 将史 森 悠一	1391～1394
---	--	---------	--	---------------------	-----------

|||||Dr. 平澤の上部消化管内視鏡教室—この症例にチャレンジしてください(連載)|||||

Vol. 35 No. 1 除菌後胃癌	平澤 俊明・並河 健 藤崎 順子・中野 薫 河内 洋	103～108
-------------------------------	----------------------------------	---------

|||||英語で論文を書くことの効能……学会発表だけじゃダメなんですか？(連載)|||||||

Vol. 35 No. 3

その 1. 学会発表と論文はどう違うの？
加藤 順 328, 337

Vol. 35 No. 4

その 2. 論文を書くのと臨床力は上がるの？
加藤 順 426, 433

Vol. 35 No. 5

その 3. 英語で書いたほうがいいの？
加藤 順 541, 546

Vol. 35 No. 6

その 4. 前向き研究のほうがエライの？
加藤 順 648, 654

Vol. 35 No. 7

その 5. 実験論文と臨床論文との違いは？
加藤 順 766, 772

Vol. 35 No. 8

その 6. まとめ—レトロの論文も悪くない
加藤 順 874, 880

|||||学会だより|||||

Vol. 35 No. 2

第 61 回 日本消化器病学会大会
窪田 敬一 146
第 23 回 日本肝臓学会大会
竹井 謙之 216～217

Vol. 35 No. 11

第 106 回 日本消化器病学会総会
持田 智 1352

『臨床消化器内科』編集委員会

編集委員：小池 和彦*, 五十嵐正広, 一瀬 雅夫, 杉山 政則, 藤城 光弘, 屋嘉比康治
(*：学術アドバイザー)

編集協力者：多田 正大, 樫田 博史

ゲストエディター：瓜田 純久(No. 6), 葛谷 貞二(No. 8), 廣岡 芳樹(No. 9), 中村 正直(No. 10)

歴代編集委員：岡 博(故人), 島津 久明(故人), 玉熊 正悦(故人), 棟方 昭博, 市倉 隆,
中村 孝司(故人), 丹羽 寛文(故人), 田尻 久雄